

ーギシ、ギシと廊下が軋む音がする。

私と両親と兄が暮らす小さなこの家は、昭和の色が濃く残る古いもの。

鄙びた田舎町の背景も相まって、この家の中にとくとくと時代はひとり取り残されてしまったようで。

どこか遠くへ行ってみたいー……。

でも、私には……。

「俺にもコーヒー淹れてくれ」

低い、掠れた声でした。

台所でひと息ついていた私の背後から、やたらと背の高い男が顔を出す。

黒い無造作な髪の毛。

目つきの悪い、濃い隈に縁取られた目。

瘦せた頬に、顎にはまばらな無精髭。

はだけた白いシャツは、意外にもきちんとアイロンがかけられ、覗く胸元は厚く逞しい。

そして、その顔立ちは、異様に端正で美しい。

この男は、私の実の兄である。
名を、伊織という。

三十になったばかりの伊織は、今をときめく売れっ子の小説家で、この古びた家に一日中籠もっては、仕事ばかりしている。

どかりと椅子に腰かけた伊織は煙草に火をつける。

そして、煙を燻らせながら、私の顔を面白そうに見つめるのだった。

——初めてこの男に抱かれたのは、いつだっただろうか。

言われた通りにコーヒーを淹れながら、ぼんやりと考える。

確か、あれは私が子供と大人の境目だった頃——……。

「なんだ？ ぼーっとして」

気づけば、いつの間にか伊織が私の背後に立っていた。

私より三十センチは上から飄々と見下ろして、逞しい腕で腰を抱いてくる。

「どこか痛いのか？」

「——ッ。兄さん」

腰を支えていた骨張った大きな手は、やがてするりと下へと滑ってゆく。

「い、いやっ！ コ、コーヒーは」

手慣れた手つきで尻を撫でられて、私は身をよじる。

スカート越しに熱い伊織の手のひらが、優しく動きまわり、時には尻肉を揉みしだく。

「締め切り明けで徹夜続きでさあ……治まらねーの」

ぐいっと伊織が下半身を押し付けてきた。

すでに滾りきったそれは、あまりにも大きい。

「……ゴム、ないし、もうすぐ母さんたち帰ってくるし……」

「そうだなあ。母さんにバシたら泣かれるかもなあ」

ぐりぐりと硬いペニス尻穴あたりを刺激する。

反応したくないのに、耳までかあっと熱くなり、息が荒くなってしまっ。

(おまんこが、ドキドキしてる。ー兄さんに気づかれたく、ない)

唇をぎゅうつと噛んで、コーヒーに意識を逸らそうとする。

ーーーそれなのに。

人の気も知らないで、伊織はべろりと私の耳を舐めあげた。

「お前、乱暴にされるの好きだろ？ 無理やりねじ込んでガンガン突けば、いつもすぐイクよな。だから大丈夫だって」

なにが大丈夫なのだろう。

伊織が私のブラウスのボタンを引きちぎった。

下着をずらして、露わになった胸を乱暴に揉みしだく。

「やだっば！ 兄さん……っ」

「でも、ここは触って欲しいんだろ？」

キュツと、太い指が乳首をつまんだ。

クニクニと扱いたり、指の腹で押し潰したりされ、快感に甘い吐息が漏れてしまう。

「ん、……あ。ふぁ」

「可愛い声。素直になりやいいのに……ほら、乳首こんなに硬くして」

伊織はずるい。

私の身体を十年近く蹂躪して、快楽を教え込んだのだから。

「一回軽く出すか」

「ーっ!! や、ダメっ! 生はやだあ!!」

「外に出したら母さんたちにバシるだろうよーほらっ! 力抜けて」

体格差もあって、ろくな抵抗もできない私の制止も聞かず、伊織は私の身体を軽々持ち上げた。

脚に手を差し込んで大きく開かれる。

クチユツとおまんこにあてられたペニスは、いつもよりすごく大きくて、硬く反りたっていてー。

いつもこうなってしまう。

仕事明けの伊織は、いつも興奮していて。

怖くて。

ーすごくいやらしい。

ぶちゅぶちゅんっ！

私の体重をかけて、一気に奥までペニスが突きたてられる。
慣らされてもいないおまんこをこじ開けて、尖った亀頭が子宮口に突き刺さる。

「あ、うっ」

「お前のまんこ、何百回抱いてもキッツイままだよなあ。なかなか全部挿入らねーし。
早くお兄ちゃんの形になれよお……」

ぴったりと私の膣壁に吸いついたペニスが、脈打っている。

「あ、ああっ！ 無理、だってばあ！ やめてっ、兄さあん」

抱き抱えられているため、私の重さでペニスが無理やりさらに奥へと入り込もうと
してくる。

二チ二チツと膺が割られ、伊織は私の気も知らないでズンズン腰を振り続ける。

「小さい頃からお前、お兄ちゃんに抱っこされるの好きだろお？ ほら、だんだん気持ちいいーって顔になってきたな……可愛い可愛い……」

伊織の無骨な指が、優しく髪を撫でる。

「ーそれくらいで、この苦しみを許すわけがないのに。」

なのにー。

気持ちとは裏腹に、だんだん私の息は荒くなってしまい、子宮が熱く重くなる。

「……っは。全部挿入ったぞ。あー、妹まんこがちんぽ全部舐めまわしてきて気持ちいい……。お前も気持ちいいんだろ？ 子宮めっちゃ下がってきてる。ほら、ポルチオもヨシヨシしてやるから♡」

ズンツと質量を帯びて、子宮がお腹の方へ押し上げられる。

硬いペニスに限界までおまんこを拡張されて、ゴリゴリと乱暴に擦られる。

「う、ああ……ふあ」

いつのまにかおまんこには蜜が溢れていて、伊織が腰を振るたびにばちゅばちゅといやらしく滴り、跳ねた。

「そろそろ出すか」

「やだ……っ！　中はだめっ!!　今日、排卵日だからあ!!」

「まじか。……ならなおさら中に出さなきゃな♡　お兄ちゃんの赤ちゃんたくさん欲しいだろっ?」

伊織は嬉しそうに私を台所のテーブルに寝かせると、蜜に濡れたペニスをギリギリ

まで引き抜いた。

ずるるろろ……っ。

「っあ……」

熱くうねるおまんこは、排卵日なのもあってもうぐちよぐちよに濡れていて、お漏らしでもしたかのように蜜をトロトロと垂れ流している。

ヒクヒクと痙攣する熱い膣内は、私の気持ちとは裏腹にペニスを求めていてー。

(兄さんの赤ちゃんなんて、欲しくないのに……)

「お前も早くイキたいんだろ？ 可愛くおねだりできたら、続きしてやるんだけどなあ〜」

「……っ」

おまんこが熱くて、ドキドキして。

「兄妹でこんなの、だめなのに。」

嫌なのに。

伊織は私の両手首を掴んで、唇に噛みついた。

「ほら、口開け」

「んーっ!? つはあん、あっ♡」

「やっと素直になったか」

我慢できなくて、舌を絡めた私に伊織は満足そうだ。

くちゅくちゅ、ちゅば……。

伊織の厚い冷たい舌が、私の唼内を貪る。

このままおまんこも、かき混ぜて、いっぱい突いて欲しい……。もう、おまんこのムズムズにしか意識がいなくなつてー！。頭がぼうつとしてー！。

「お兄ちゃんっ！ お兄ちゃんのおちんちんでイキたいっ」

子供の頃のように、甘えておねだりしてしまった。

「よくできました♡ あー、俺も我慢できねえ」

ズンツと、待ちわびたペニスで最奥まで貫かれる。

「ずっちゅ、ずっちゅ、ずっちゅ♡」

ばちゅばちゅ、ぬちゅつ、パンパンパン!!

それから、反り立つ極太ペニスでおまんこを捏ねて、かき回して、激しく抉るよ
うに突かれて……。

「あつ、あんあんっ♡ きもちいよおーっ♡ あー、ああーっ」

伊織が私をぎゅっと抱きしめて、密着したまま腰を振る。

剥き出しの乳首が伊織のシャツに擦れて、クリトリスもペニスの根元でぐりぐり刺
激されて、すごく気持ちがいい♡

伊織のペニスをおまんこでぎゅうぎゅう締めつけて、伊織の厚い胸に顔を押しつけ
る。

煙草と汗の匂いがする……。

「お前のまんこ最高だな……やっぱり兄妹だから相性がいいんだろうなあ」

伊織は私の頭をまた撫でて、息を大きく吐いた。
イキそうなのだ。

兄妹だから、分かる。

腰の律動が激しく、速くなる。

パンパンパンパンパンパンツ!!

「んあっ♡ あーっ♡ おっおっ♡ ああんっ」

蜜が飛び散り、テーブルを汚す。

伊織の熱いペニスに、ビクビクと収縮する。

「オラッ！ 兄ちゃんぽで孕めっ」

どぴゅどぴゅどぴゅっ♡

あまりにも大量に吐き出され、私のおまんこからこぼり、と入りきらなかった精子が溢れでた。

「う、あ♡ ああ♡♡」

「クソ、出したりねエ……部屋行くか……」

ちゅぽん、とペニスを抜いた伊織は、精子がみっちり詰まった私のおまんこに指を入れた。

伊織の長く骨張った指が、柔らかなマン肉を割ってゆく。

クチュクチュとイッたばかりで弛緩した膣内を弄りまわしながら、反対の手でクリトリスを剥く。

「お、すぐキツくなるのな」

「んひ、ぎいいいっ♡ らめ、イッたばかりだからあ♡」

剥いたクリトリスをぐちぐち擦られ、潰されて、私ははしたなく両脚を開いて、尻を振った。

膣内がまた熱くなり、伊織の指をキュッと締めつける。

——また、イクッ♡ イッちゃうっ♡

「まだ駄目」

燃えるように熱く、あと一回擦られたら絶対にイッてしまうおまんこから、伊織が指を抜く。

ちゅ、ぽ……。

「焦らしたほうが、もっと気持ちいいってなるぞお？ あ、もう母さんが帰ってくる頃かぁ。やめるか？」

伊織は意地悪そうに言う。

自分でおまんこを触れないように、私を拘束するように強く抱きしめて。

「っ、やぁ。イキたいの……っ」

「よろしい。お前はお兄ちゃんのものだからなぁ……いっぱい種づけしてやるよ」

発行日 2023年7月

サークル 銀色の花

著者 星野銀貨